

NGOドクター奮闘

東京から飛ん「救援、初動がカギ」 だ鎌田さん



診察に飛び回る鎌田医師

壊滅的な被害を受けた神戸市長田区で、けが人や病人の診察に飛び回る医療団の中に、東京都葛飾区の開業医、鎌田裕十朗さん(三八)

の姿がある。昨年十一月、NGO(非政府組織)「アジア医師連絡協議会」(AMDA、本部・岡山市)の一員として、アフリカにルワンダ難民の診察に赴き、難民に車を強奪される危機を体験した。鎌田さんらAMDAのメンバーは「国内も国外も同じこと。地元医師の体制が整うまで、私たちがつなぐ」と、懸命の治療を続けている。

「診療の準備が整いました」。避難所となっている長田区の県立野田高校の体育館を埋め尽くした被災者に対して、鎌田医師がハンドマイクで呼びかけると、

診察室の前にはたちまち五人ほどの列ができた。二十一日午前十時、同校を訪れたのは、三人の医師と看護婦二人。地元保健所の床に毛布を敷いて泊まり込んでいる鎌田さんらが、早朝ミーティングの後、車で同校に到着した。体育館の入り口教官室のソファやいすを並べ替えて即席の診療所を設置。

「ヒロシ君、どうした」と聴診器をあてる。「へんやせんがはれてるな。看護婦に投薬を指示する。六十歳代の女性、四十歳代の男性など、診療は午前中いっぱい続いた。AMDAは日本やフィリピン、ネパールなどの医師が八四年に結成。難民キャンプや大災害地で、診療活動を行ってきた。AMDAの信念は、「災害救助で犠牲者の数を決めるカギは、最初の十二二十四時間にある」というもの。国内災害では初の出勤となった今回も、地震直後に行動を開始、十七日午後四時には同会の医師三人が神戸に向かった。乏しい医療設備での応急手当ては経験が豊富とはいえ、暗やみの避難場所に待っていたのは地獄絵図だった。

医師の一人は「それぞれ腰の骨を折った夫婦が床に寝かされ、うめき声を上げていた。命に別条がないと見られて、救急車にも乗せてもらえなかったよ」だ」と当初の混乱がりを語る。第二陣で現地入りした鎌田医師は「ぼつ然自失で力なく歩いている神戸の被災者を見て、ルワンダで会った難民の表情を思い出した」と話す。共通するのは恐怖と絶望感。「日本人が、あの表情を浮かべるのを見るのはショックだった」乾燥、寒冷、低栄養で集団生活する避難所は、難民キャンプと環境が酷似している。「感染症が猛威をふるうのに絶好のコンディション」といい、悩みは尽きない。

NGO活動に鎌田さんを駆り立てる原動力は「ほかの医者が行けない所で、困っている人の役に立ちたい」という情熱。「医師ならだれでも一度はシユバイツァーを夢見るでしょう」と、次の避難所に向かった。